

長野県中野市で夏期まで繁殖したチョウゲンボウの環境利用

○本村健(中野市教育委員会)・常田英士(十三崖チョウゲンボウ応援団)・藤井幹(日本鳥類保護連盟)・松永聡美(日本鳥類保護連盟)

はじめに

- ・鳥類の営巣時期は、食物と関連して変動する場合がある(Ligon 1974、Schreiber 1980)。
- ・チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* は、営巣時期と食物の関係が明らかになっている種である(Daan *et al.* 1990)。
- ・本種は主食のハタネズミ類の捕食のため、植生被度が低い春期での繁殖が有利である(Korpimaki 1986)。
- ・それならば、繁殖を遅く開始し夏期までかかるような場合、被度の低い植生を利用するのだろうか？

対象種



チョウゲンボウ
Falco tinnunculus
写真:小林進

- ・日本では通常3月から6月までの、概ね春期に繁殖する。
- ・草地や農地に生息するハタネズミ類を主食とし、他に小鳥類、昆虫類、爬虫類などを捕食する(Village 1990)。



ハタネズミ
Microtus montebelli

目的

長野県中野市で繁殖が夏期までかかったチョウゲンボウの環境利用を解明



調査地



- ・長野県中野市
- ・標高平均約340m
- ・水田、果樹園、河川、河川敷の草地等が存在。

方法

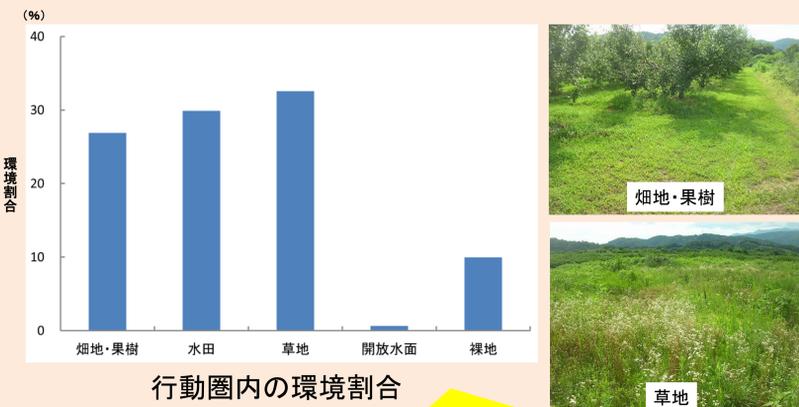
1. 個体を捕獲し、4gの電波発信機とカラーリングを装着(許可番号29森推鳥第16号の15)。
2. 電波を八木アンテナと受信機で受信し、8倍の双眼鏡と60倍の望遠鏡で個体を確認。
3. 位置、餌メニュー、採餌場所の被度と群落高を記録。
4. 行動圏内の各環境の面積及び採餌頻度を算出。

結果

捕獲個体 メス成鳥 オス幼鳥
追跡調査 2017年6月27日～8月1日

メス成鳥の行動圏面積と環境割合

6月29日に発信機脱落。その後はカラーリングで確認。
行動圏27.4ha 調査時間 29時間25分 追跡時間 25時間 3分

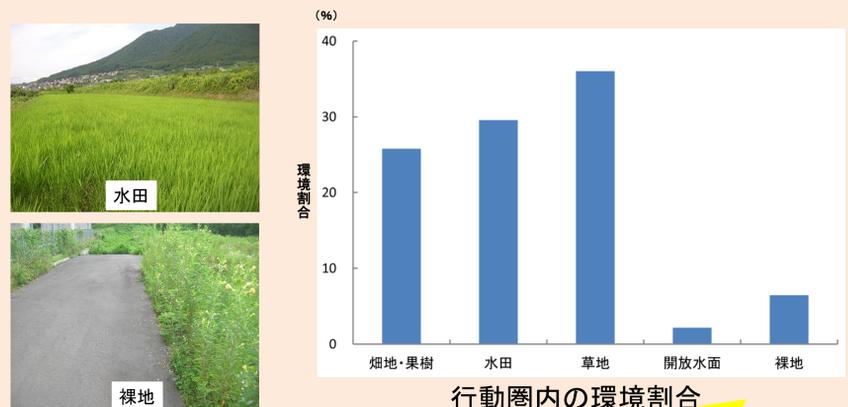


行動圏内の環境割合

草地、水田、畑地・果樹の割合が高かった。

オス幼鳥の行動圏面積と環境割合

8月2日以降確認できず。
行動圏17.3ha 調査時間 28時間44分 追跡時間 20時間12分

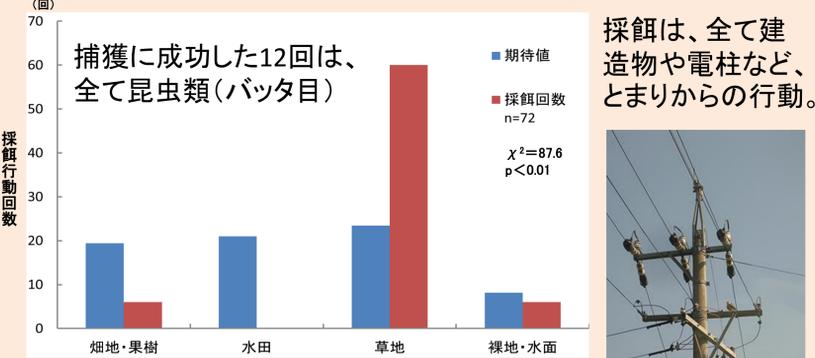


行動圏内の環境割合

草地、水田、畑地・果樹の割合が高かった。

2個体をプールした採餌行動回数

2個体は親子で、連れだつての行動も見られたため、データをプール。



2個体の採餌行動回数

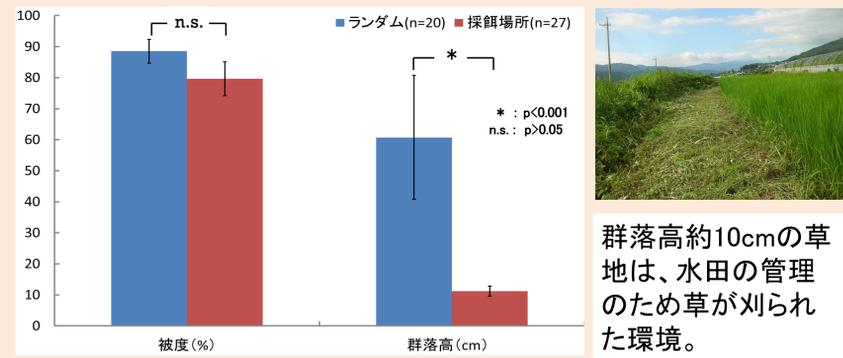
草地を多く利用していた。

採餌は、全て建造物や電柱など、とまりからの行動。



採餌場所の植生被度と群落高

行動圏内のランダムな20地点と比較。



採餌場所の植生被度と群落高の比較

植生被度に差はなかったが、群落高は低く、平均約10cmであった。

群落高約10cmの草地は、水田の管理のため草が刈られた環境。

考察

採餌環境と採餌種

(先行研究) 春期: 草地でハタネズミ類を採餌。
↓
(本研究) 夏期: 草地で昆虫類を採餌。
↓
東日本のハタネズミは夏に繁殖の休止期あり(木村 1980)。

採餌環境の状態

(先行研究) 春期: 植生被度の低い環境を利用。
↓
(本研究) 夏期: 草が低く刈られた環境を利用。
↓
人間の農地における作業を利用し、繁殖に成功。

夏期における採餌地点の多くは、水田の管理のために草が刈られた環境であり、繁殖を遅く開始し夏期までかかった場合、重要な餌場となると考えられた。